



1869年(明治2)頃の中島川河口付近。向かって右が庄吉が育った西浜町(長崎大学附属図書館蔵)

### ■ 米問屋梅屋商店

庄吉は、1868年(明治元)11月26日、本田松五郎・ノイ夫妻の子として生まれ、すぐに子供のいなかった遠い親戚筋にあたる梅屋吉五郎・ノブ夫妻の養子となります。

吉五郎は長崎の西浜町(現在の長崎市浜町)で「梅屋商店」の看板を上げ、貿易業と米穀商を営んでいました。

### ■ 義商の片鱗

梅屋家に養子として迎えられた庄吉は、しばしば店の売り上げを持ち出しては、貧しい人に配っていたといえます。

また弱いものいじめが大嫌いで、町の人たちに対してゆすり・たかりをする悪党グループ相手に大立ち回りを演じたことも。

困っている人を見ると放っておけない性格は持って生まれたものだったようです。



10歳頃の庄吉(※)



### ■ 白ドッコ vs 黒ドッコ

庄吉は、16歳のとき、不良グループのリーダー天田伝吉と大ゲンカをしました。天田率いる「白ドッコ組」は元来、町の人々に親しまれる存在であり、「長崎くんち」のときに、諏訪神社に奉納される蛇踊り等の出し物に「もってこーい、もってこーい」(もう一回、もう一回)とアンコールの声をかけ、奉納踊りを盛り上げる集団でした。ところが、天田率いる「白ドッコ組」は町のひとたちをおどしてお金を奪ったりしていて、庄吉はそれに腹を立て、家業の精米所で働く若者に声をかけ「黒ドッコ組」を結成し、金比羅山でたたかって、見事うちやぶったのです。そのことは「ポンポコポン」というノゾキめがねで取り上げられ、町中の評判になりました。



### ■ 猫魂(ねこだま)が宿る少年

庄吉は、まれに見る強運の持ち主でもあったようです。幼少期、家の近くの中島川で溺れ、死んでしまったと周囲の人々があきらめて葬式をしている途中に息を吹き返したり、アメリカ留学を志して乗った船が火災となり、ほとんどの乗客が亡くなる中で生き残るなど、生命力の強さで窮地を脱しています。長崎独特の表現で「猫魂が宿っている」といわれるほどでした。